

A1  
75.3



左右両頁露光量調整、重複撮影

京都府師範  
学校教諭

田中竹次郎編

卷之三第一級

# 改 小 學 初 等 科 日 用 事

一名改正小學生教訓

教科書出版社 大黒屋書舗

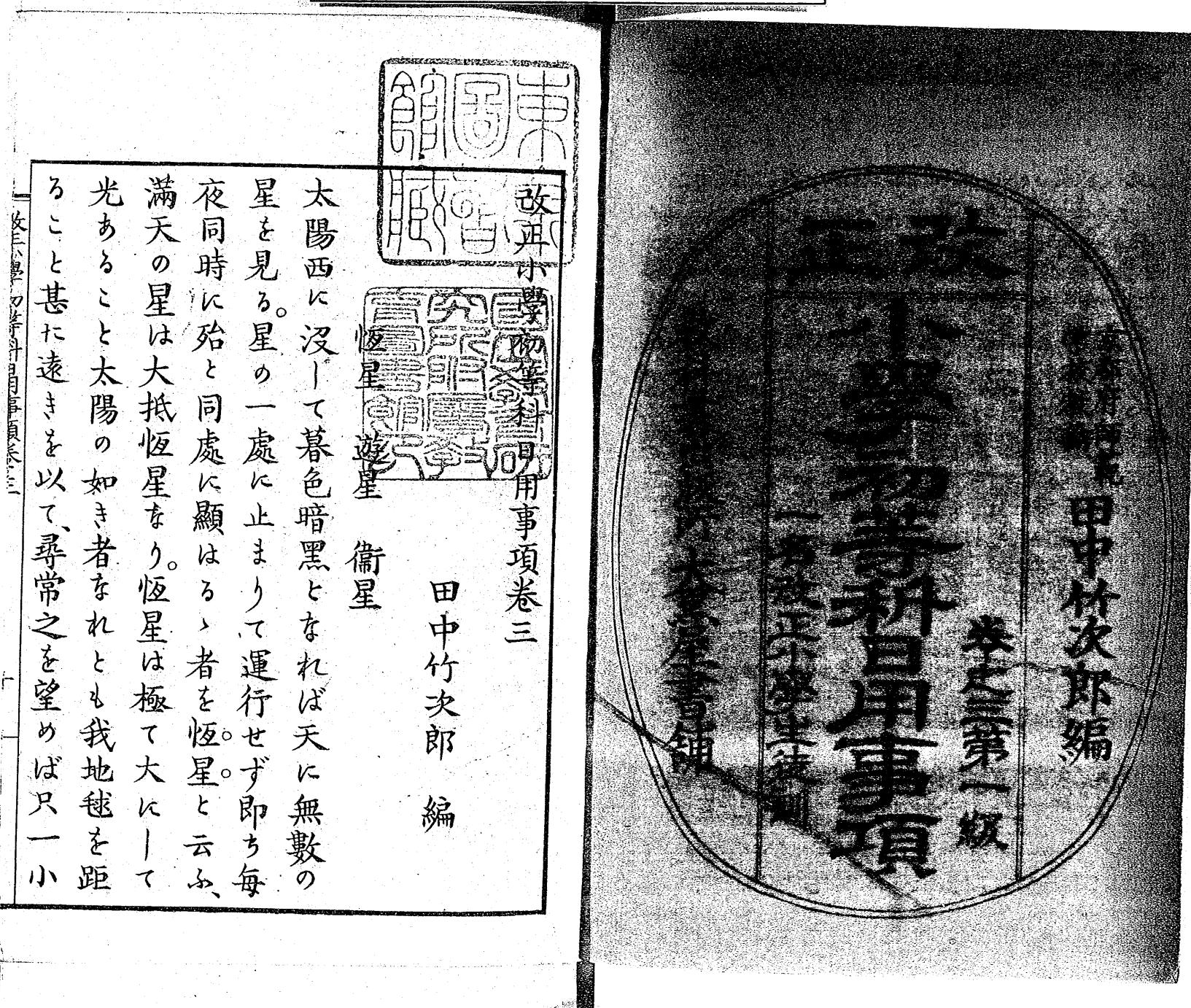
改正小學初等科日用事項卷三

田中竹次郎 編

恆星 遊星 衛星

太陽西に没いて暮色暗黒となれば天に無數の星を見る。星の一處に止まりて運行せず即ち毎夜同時に殆ど同處に顯はるゝ者を恒星と云ふ。満天の星は大抵恒星なり。恒星は極て大にして光あること太陽の如き者なれども我地獄を距ること甚だ遠きを以て尋常之を望めば只一小

左右両頁露光量調整、重複撮影

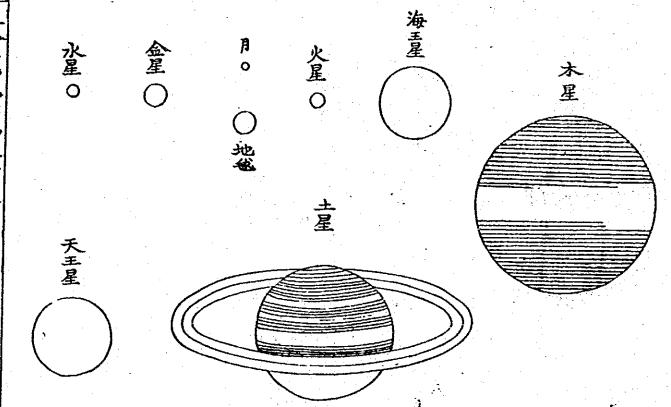


太陽西に没して暮色暗黒となれば天に無數の星を見る。星の一處に止まりて運行せず即ち毎夜同時に殆ど同處に顯はるゝ者を恒星と云ふ。滿天の星は大抵恒星なり。恒星は極て大にして光あること太陽の如き者なれども我地獄を距ること甚だ遠きを以て尋常之を望めば只一小

點の光輝を見るのみ。又衆星の間に在て或夜は東に顯はれ、或夜は西に顯はれ常に處を定めず天間を遊行するが如き星を遊星と云ふ、我地氷も亦遊星の一なり。遊星は皆地球と同く一個の世界にて空中を運行し、數月或は數十年にて太陽を一周回す。

遊星の數は其發見する所近年に至る迄凡一百餘あり、其中最も大にて且つ明なる者は水星  
金星、木星、土星、天王星、海王星にて之に地氷を合へて八遊星と云ふ。其他は皆小な

諸遊星比較の圖



り之を小遊星と云ふ。  
世に曉星、又た夕星と稱  
して曉夕に東或は西に  
顯はれ、其光白くして新  
月の如き光を放つは金  
星なり。

木星、土星、天王星、海王星  
は皆地氷より大なり、此  
四星と火星及び地氷に  
は又小なる星ありて、其

金星○

天王星

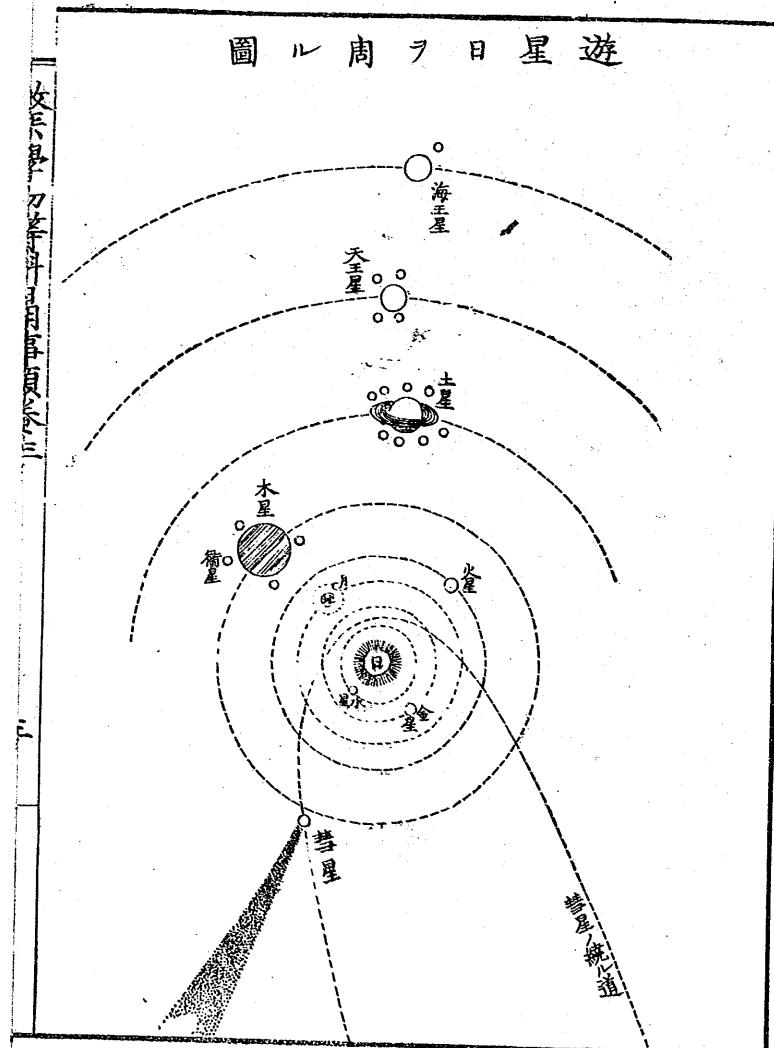
地氷

木星、土星、天王星、海王星

周圍を繞れり。之を衛星と云ふ。其數は各異なり。月は地獄の衛星なり、月の體は小なりと雖も其近きを以て見る所甚だ大なり。月には盈虛あり。是地上より其太陽に照かる處を正面に望み、或は横に見る時あるが故なり。

太陽は一の恆星にて諸遊星の中心に居り、之に光と温とを與ふ、其大諸遊星を合へたるよりも大なり。遊星は皆太陽を周り、衛星は所屬の遊星を繞り、且つ之と共に太陽を環る者なり。今左に圖にて其有様を示さん。

遊星日ラ周ル圖



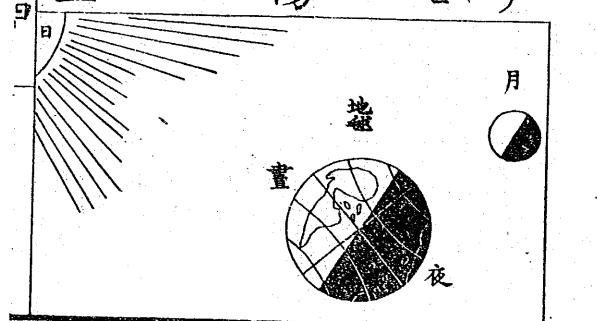
慧星は遊星の一種にて、  
或は鮮明なる長き尾を曳  
く者あり、或は種々の光芒  
を發する者あり、太陽に近  
くときは大く遠ざときは  
小く視ゆるなり。慧星の出  
づる水旱兵爭等の前兆な  
りとし、大に恐怖する者あ  
れども、是亦遊星の一種な  
れば其出づる隱るゝ固よ



り定期あり、豈に特に地氷の變亂を報ずるが爲  
めに出づる者ならんや。

### 晝夜の別

地氷は運行して太陽を一周回す  
る三百六拾五日と六時なり、之を  
一年とす。其回る間一晝夜に別に  
自ら一旋轉す。其轉する毎に太陽  
に向ひたる處は晝となり、太陽に  
背きたる處は夜となるなり。故に  
夜は太陽を見ずと雖も、太陽は晝



夜共に光なきこと無し、唯地毯の太陽に向ふ處と向はざる處に因りて晝夜の別あるのみなり。是故に地毯の東、晝なるときは西は夜となるなり、因て我住居する處、晝なれば我と反対の處は夜なることを知らべし。圖を参考せよ。

### 氣候の寒暖

春は暖にして夏は暑く、秋は冷にして冬は寒し、斯く四時に氣候の異あらは、是地毯が太陽の温熱を斜に受くると、直に受くるとに因て然るなり、光温直なるときは其射る處小く、斜なれば大

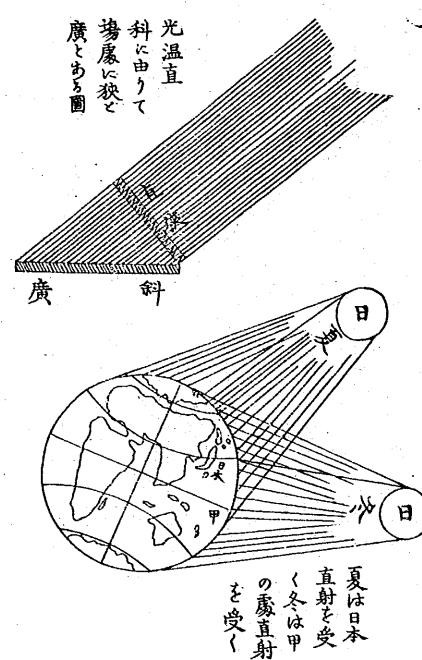
なる場所に廣がらざるを得ず、是れ直斜に因て暑寒の異なる所以なり。我邦は夏は殆ど太陽の直射を受け、冬は甚き斜射を受く、春秋は其中間なれば、寒

暑共に甚し

からざるなり。

下の圖を見て其理を

悟るべし。



霧圓氣 風 雲 霧 雨 雪

霰 電 露 霜 虹 雷 電

稻妻 鬼火 流星

○霧圓氣とは地氈を被包する空氣なり、空氣の地氈を被包するは猶ほ卵白の卵黄を包むがごとく、人のの中に生活するは猶ほ魚の水に在るがごとく、空氣は通常無色透明なれども大約地上二十餘里の高さに積重するに因り其色青く、天の蒼々たるは是其色なり。

○風は空氣の冷熱均一からざるより生ず、今夫

れ地面の一處極て熱するときは、其地の空氣膨脹して輕粗となり高く浮ぶ、此時近傍の冷地に在る所の空氣は重厚なるを以て急に空氣の輕浮せる熱地に突き入らんとして、此地より彼地に流動す、是れ風の發る所以なり。

○雲及霧は微細の水泡羣集にて成る者なり、空氣中には常に多量の水蒸氣を充滿すると雖も熱を得ること多き間は見ること能はず、然に空氣の寒冷に遭て熱を失ふときは濃縮して相集り視るべき者となる、雲霧是なり。此二者は同一を

れども唯其高低に隨て名を異にするのみ、高きときは之を雲と謂ひ低きときは之を霧と謂ふ。

○雨は空中の水蒸氣凝て雲と為る者、愈濃縮して遂に點滴と為り地上に落来る者なり。

○雪は雲の大寒に逢て點滴と為らざる前に氷結したる者なり。此氷片相集て雪花と為り紛々落来る其形皆六出なり。

○霰は其已に點滴と為りたる後に氷結して降る者なり。

○雹は夏日に多く大抵雷雨の前に在り、其内部

は粗糙にて外部は透明なり。蓋一霰粒の高處より落来る間に、水氣其外部に附着し甚き寒冷の為に凍て冰質の被衣を為す者ならん。

○露及霜の生するは空中の水氣夜に入て寒冷なる草木の葉に觸るれば、滴化して露と為り、溫度更に降て冰点以下に達すれば、氷化して霜となる。露は草木を濕り、霜は之を害す。

○虹は日光雨滴に映し反射して七色を顯はす者なり。太陽に背き水を吹けば小なる虹を認むべし。夕虹は東に、朝虹は西に生ず。

○雷は電火の雲より雲に入り、又は地に入る時空氣を激動する響なり。

○電は是れ電氣と稱する自然力の働きにて陰電氣と陽電氣と平均する時發する火光なり。電火の雲より地に入る之を落雷と謂ふ。雷雨の時、高塔或は喬木の下に避るは極めて危し、是れ雲の電氣、地の電氣と平均するは多くは高き物に頼ればなり、故に唯地に平臥して雨の過ぐるを待つべきのみ。

○稻妻は是れ遠くして雷鳴を聞かざる電光な

久、驟雨ノ後に多।

○鬼火は沼澤墳墓の邊に稀に顯はるゝ小火燭なり、是れ地より含燐水素と稱する一種の氣を生ず、此氣の性たる空氣に觸れて自ら燃じ幽微なる光を放つに因る、世人の之を奇怪と為すは妄言なり。

○流星は是れ太虛を遊行する小天體の地越近傍に來り、其引力に引かれ、零圍氣の中に入り空氣と摩擦し熱を生ず、終に火光を發する者にて、其飛行するとき光尾を曳くは、蓋一躰質熔燬

一分碎飛散するに因るなり。

### 空氣并に日光

前にも云へる如く我地毡には空氣と稱する氣状物あり、此物視る可らずと雖も人物其中に在りて生活す。人の呼吸するは即ち此空氣を吸ふて有用の氣酸素なる者を取り、體中無用の氣、炭酸なる者と交換するなり。是を以て一室の中に多人數群聚して空氣の流通宣へからざるときは、人々呼吸する際に酸素を吸ふて炭酸を呼くか為に、忽ち其室内の空氣を汚し、人々必ず頭痛、

眩暈めまいを起すに至るべし。故に人の住家は成る可く空氣の流通を良くして此患を防ぐべし。炭酸は呼吸より生ずるのみならず、薪火、燈火等よりも生ずる者なれば、火を盛に燃せす室内などは殊に多く窓戸を開て、空氣の流通を十分にすることを務むべし。然らざれば意外の病を生ド悔ゆとも及ばざること往々之れあり。

炭酸氣の多き處は燈火も忽ち消ゆる者なれば、若一深き井戸或は久く閉ぢたる穴藏に入らんとするには、必ず先づ燈火を釣り下へて其内の

空氣を試むべし。此時に於て若一燈火の消ゆることあらば其内に炭酸の多く集りたる兆なり。故に此炭酸氣を散へ盡すに非ざれば決して其内に入ること勿れ。

總て山野草木多き地は其空氣常に清潔なれども、市街雜鬧の處に在ては、種々の有害物を混ずること多く、是れ傳染病等の都府に多くて田舎に稀なる所以なり。故に市街に住居一室内に閉籠ちときは識らず知らず健康を害するを以て、必ず廣闊の處に散歩へて、清氣中に呼吸する

ことを務ひべし。

○陰地に生する草木は、陽地の艸木に比べれば其葉色の緑も淺く、且つ弱きが如く、闇き家に住む人は、明き家に住て日光を見る者よりも其色蒼白に成りて身體も亦常に柔弱なり。故に人家は成丈窓戸を開て日光を入れしめ、室内を明くることに注意すべし。然ども夏日の如きは強光の為に眼を害すること少からざれば日覆を用ひて之を豫防せざる可らず。其他春秋温暖快晴の日には、日光の照す處に於て適宜に運

動遊歩するときは、陰處に於て為すよりも大に健康に益ある者とす。

### 傳染病豫防法

凡て傳染病の流行蔓延するに至ては治療の法も洽く及び難く、終に無數の人民を害し、其禍言ふ可うざるに至る。然に豫防法あり能く之を守るとときは其病害を免るべし、又消毒法あり能く之を行ふとま、其病毒を滅すべし。傳染病中最も恐るべき者は虎列刺ヒョウザイ、天然痘チブテリア、赤痢クレバ、發疹并小腸チビスの六病より瘧カク、疥癬カイセン、麻疹マジン。

等にて、各病皆豫防の法を異にすと雖も、其大要を言ふときは四に出でず。其一は病毒の因て發生蔓延する所以の者を除き去るに在り、之を清潔法と云ふ。其二は人々養生を慎み身體中、病に感ずべき者無からむるに在り、之を攝生法と云ふ。其三は病毒の傳染來る媒介を遠くるに在り、之を隔離法と云ふ。其四は火力、藥品を用ひて病毒を消滅するに在り、之を消毒法と云ふ。  
○清潔法 病の傳染するは蓋し、病毒の外方より人體に入りて爰に其毒ヲ發する者の如し、此

毒は地中水中等に繁殖し、次第に殖江空氣中に入り、夫れより人體に入るを得る者とす故に病者の吐瀉物等地中水中等に入るとときは直ちに其毒を散漫し、其土地に於て衆人一度に同病に罹るに至るなり。是を以て觀れば總て不潔なる者は皆病毒を養ふ者なれば、芥溜、下水及び大小便所等は常に掃除を怠る可らず。

○攝生法 凡ろ人健康にて身體中少一も申分なきときは、病毒の侵入来るも之を防ぐべき力ある者とす、然ども過度に勞動し、又は飲食の

不良或は不足等にて之が為に身體不十分なるときは、病毒に侵されるゝこと尤も甚し。故に傳染病流行の時には殊に養生の法を嚴重に守り、病毒の侵入来る處なからむるを肝要とす。

○隔離法 傳染病毒は啻に地中若くば水中に舍りて傳染を廣むるのみならず、病者の吐瀉物呼氣等より感染することあり。故に病體死體其排泄物等は速に之を隔離して、他人の之に觸れざる様意を用うべし。

○消毒法 凡う傳染病毒は其物極て微にて

眼に見ゆざら黴の如き者にて、空氣或は水中に混じ、衣服及び器具等に附着して人の身體に入り、其病を發する者とす、此病毒を傳送する者を滅するときは、病毒も亦滅し盡すべし。故に火にて之を焼き盡すは第一の消毒法とす、然ども品によりては焼き得ざる者あり、此等は種々の薬品を用ひて、之を薰べ、之を洗ひ、其病毒傳染の力を消滅すべし。薬品の中、主たる者は石炭酸水、苛性石灰水、綠礬、硫黃等とす。

左に記す所は、各人平日意得べき要件なり。

流行病に限らず、總て病を豫防するには平日攝生の善良なるを要す。

諸病流行の時は食物に注意し、新鮮の肉類、消化易き蔬菜等を用ひ、平日の慣習かんじゆを改めざるを良とす。

飲料水は清水を撰むべし、若し稍不良の水なるときは煮沸しゆへいし或は濾過ろくわすべし。

身體、衣服の不潔、飲食の不良、不足或は飽満、勞力の過度、露眠ろうみん、夜行其他總て身體を衰弱くずすきせしむる事は皆之を為すべからず。

流行病あるときは特に芥溜、下水、市街の便所、病人ある家等に近づく可らず。

痘瘡は一回之を患ふれば、復た之に感ずること鮮し、故に此病を豫防するには種痘を第一とす。

### 結尾

以上記する所は人々日常知らざる可らざる事項の大要なれば、能く之を暗記以て普通の事に應せば、益を得る多きに庶幾からん。

### 改正小學初等科目用事項卷三 大尾

明治十五年九月廿九日 売書 版權免許  
明治十七年十月二日 改正 版權免許

正價六錢

原編者并  
改正編者

京都府平民

田中竹次郎

上京區第廿八組突抜町八番戸

大黒屋太郎右衛門

上京區第卅一組下丸屋町八番戸

京都府平民

原出版人  
改正出版人

### 製本販賣所

京都河原町通三條下二丁目

教科書出版所 大黒屋書舗